

Chapter 11 自然に生まれてくることをすること

言語変化の元からの原因

・イントロダクション

言語変化の諸原因は2層に分類され、上層に位置する原因は社会的きっかけである。これらは、言語の中で隠れた傾向の深層原因を目覚めさせたり、促進したりする。本章では、下層に横たわる傾向の概念を検討する。言語体系を破壊するかのように出現するいくつかの特定の変化を検討する。

発音を簡単にするといった意味での努力の軽減化は最も容易に心に浮かぶ破壊の原因として提案されたものである。努力の軽減化理論は19世紀に流行した。文明の悪と対抗する美德を持つ者として、「高潔な野人」を理想とする傾向があった。マックス ミューラーは当時洗練された人々は、文明に内在する怠惰が理由で、原始的な言語で要求される強力な発音運動の使用を怠っていると主張したが、この主張は全く現実にはそぐわないことが判明した。言語変化としてはより洗練された見方であるにもかかわらず、非難を受けた見解は人間の解剖学的、生理学的、心理学的構造の理由から、言語には変化の傾向が必ず組み込まれているといった説である。この章では、世界中の言語に何度も起きてきたし、現在でもなおも起きている、いくつかの発展を外観することによって、この観点の具体的な考察を進めることにしよう。

・子音の脱落

言語の発展によって、語末の子音の消失した現象が行なった。フランス語のnを考察していくと、9世紀から14世紀の間に、an, en, bon, bienといった語の語末のnを消失して、その直前の母音を鼻音化した。なぜなら、発音する時、舌の位置が低くて、口をおっきく開いた音の方に变化するからだ。20世紀に入ると、音声学者は筋電図記録法で音がどのようにして作られることを発見した。つまり、電極を口の中や周囲に植えて口の動きを記録する方法で、癌患者の観察で言語変化の原因がわかった。母音[a]の発音中に、鼻腔が完全に閉じられていないから、2つのことを生み出す傾向が現れる。一つは、[a]に後続する不必要な[n]が省略される。二つ目は音体系の均衡を維持するため、他の母音も鼻音化する。また、語末の無声閉鎖音の[p], [t], [k]が多くの言語で消失した。この変化は、語末の音の発音の必然的な弱さによるものだ。[p], [t], [k]が語末に来る場合で、それを強調して言っても、破裂がかなり弱いことが分かる。さらに、その音が特に、破裂されないと聞き取りにくいといった事実によって促進される。そこで、全体的に見ると、語末の子音は長年の間に消失するのが正常と言えるのだ。

・他の自然な傾向

言語学者はある種の音が他の音に及ぼす特異な影響によって起きることを発見した。例えば、familyの意味famblyや英語のbrambleやギリシャ語のambrosiaのそれぞれの語は初期の段階ではbを欠いた、fam(i)ly, braem(e)l, amrotiaであった。それは[ml]とか[mr]の音連鎖で、[mb]と[mbr]に変化する傾向あることを示す。なぜなら、発音する際は、両唇は[m]の発音中には閉じられ、鼻腔は開く。最後で両唇が開かれる前に鼻腔が閉じられると、侵入的[b]が現れる。また、隣接する音への影響はngの場合に見られる。その音は、以前は[e]であった音を[i]へと向かって移動させたので、Englandという語はかつてはEngla-londであったのが、今ではまるでinglandと綴られたかのように発音される。これらの変化は、人間の身体構造による必然的な結果である。

- ・ 統語における自然な発展

同じ音の変化が地理的、文化的に離れた言語に起きるのが見られるのと同様に、同じ統語における変化が起きていることが見られる。例えば、古代ギリシャ語といくつかのニガー・コンゴ諸語(Niger- Congo)は基本的な語順の面で著しく類似した段階をふんで変化してきた。ここでは上述の二つの言語に見られる二つの変化の傾向を考察する。一つ目は、文中で目的語と主動詞を接近させたがる傾向である。これは現代英語の、Henry Seduced Petronella in the woods on Saturday. と、^{*} Henry seduced in the woods on Saturday Petronella. という二つの文を見ればわかる様に、seduce の目的語である Petronella を直後に置く方が好まれる。二つ目は、一つの動詞に二つの目的語を持つ文に関する重複の傾向である。例えば、Aloysius likes shrimps and oysters. は、Aloysius likes shrimps and Aloysius likeoysters. とかつては表現されており、このことから言語には不必要な反復を省略する傾向があると言える。したがって、古代ギリシャ語とニガー・コンゴ諸語に属するクル語(Kru)においては目的語と動詞の接近の維持と、反復の消去といった二つの自然な傾向によって、動詞を文末に置く普通のパターンを破壊することになり、それゆえに動詞は移動可能となり、英語の様に主語と目的語の間といった文の中央に動詞を置くことが標準となった。

- ・ 世界を覆う影

言語は世界を影で覆い、その影を保持しようとするとしばしば言われるが、それはつまり、言語はうっすらといくつかの外的特徴を複写するが、それは表彰性という現象である。表彰性に関する主張は二段階に分けられる。第一に、言語が複数形、動詞の形態素、新しい事物に対する新語を生み出す際には、それらの一般的な行為は現実世界における行動を複写する自然な嗜好に従う。第二に、言語がこの複写を維持する可能性は非常に高いので、必ずや言語の発展に影響を与えるというものである。

Chapter12. パターンの修復(治療においての変化)

- ・ イントロダクション 言語は自己保存のための驚くべき本能を持っている。それは、壊れたパターンを修復し、崩壊を防ぐ自己統制装置である。より正確に言えば、その様な調整を、記憶しておかなければならない情報を組織化するという生得的な必要性に応じて話者が行う。言語はある意味で、庭であり、話者はその庭を良い状態に保つ庭師である。

- ・ 音のパターンの整理

いい庭師が野菜をきちんとした列で栽培する様に、言語においては、特に音の領域においてきちんとした形式のパターンが好まれる。音は言語によって異なる。各言語は人間の発声器官が生み出す音の中から一連の違った音を取り出すが、これはランダムに行われているのではなく、母音と子音が二者あるいは三者で対称的に配列される傾向が強い。子音においては有声音と無声音が対称的に現れ、摩擦音においては変化が今なお続いている。母音においては母音三角形が示す様に、前母音と後母音が対象的で、対称を組む一方が移動すると、もう一方が数年または数十年後にそれに従う傾向がある。この現象の例として、[ai]と[au]が共に動く機会はなく、一方が動くともう一方がほぼ必然的にそれに合わせるように従うといった、四章でのマーサズ・ヴィニャードの変化や、ロマンス諸語の初期の歴史に見られる。話者は交流の中での音の往復を気に留めな

いことが多いが、語と語尾に関する時にはパターンの整理に気づいている場合が多い。

- ・ 絡み合った電線の整理

言語を整える人間の傾向があり、これはびらばらになった先端を切り捨てることを好む。その例として英語の複数形の取り扱いが上げられる。何世紀にも渡って英語の複数形を整理しようとしてきたのである。古英語には、複数を示す概念を表すのに異なる語尾があった。主に-sと-nである。シェイクスピアの時代にeyen(複数の目)などあったが、現在ではmen,sheepなどの例外を除いて、-sが一般的な複数形である。言語というのは明白で率直な構造を好む傾向があるわけである。

- ・ 構文の円滑化

人間は構文の大部分を整理していることに、普通は気づかない。なぜなら、整理がしばしば誤解の過程によって起きるからである。話者たちはよく知られた構文との表面上の類似によって、複雑で不透明になった構文を誤って分析する傾向がある。話者はあるタイミングをきっかけに、無意識のうちに誤って解釈し、言語の構文パターンを整理するのである。

- ・ 古いがらくたの利用

言語は訳のわからない役に立たないものを過去から引き継いでいる。標準形のam,is,areの代用としてのbeの使用は、1世紀ほど昔に黒人話者が話していた英語の遺物と推定することもできる。しかしこれが消滅しつつあるのか、増えてきている話し方なのかは議論の余地がある。古いがらすたの再利用は「適応」と区別するために「廃物利用」という用語が与えられた。

- ・ 到達不可能な均衡

言語がパターンを維持して整理する力が強いので、多くの学者が簡単化こそが最も重要な動機勢力であると信じた。さらに一部の学者は原語が最高の簡単へ到達しないのはなぜなのかという疑問も抱いた。だが、言語は自然の崩壊勢力が働いていて、予想もつかない崩壊的な変化を、もたらすこともあり連鎖反応が起きている。

- ・ Research(発表者による要約)

言語変化について考える時に、「見えざる手」理論(以下 IHT)がある。IHT を 理解するためには、まず「自発的秩序」という概念を理解する必要がある。自発的秩序とは、集団内の各個人が各々の利害・関心にしたがって行動していながら、無意識のうちにある種の「秩序」をつくり上げることをいう。(Keller(1994: 13- 18)。Keller(1994)の力点は、言語変化を自発的秩序とみなしうるかどうかという問いに置かれている。言語変化は明らかに意図的な行動の産物でありながら、特別なケースを除いて言語変化それ自体を意図する話者はいない。つまり、言語変化は「意図的な行動の意図されざる所産」であり、そこにはいかなる意志も計画も働いていない。結局、説明の鍵となるのは、個々人の行動を特定の「志向性の偏り」へと導く根本原因を究明することである。この根本原因とはある種の行動規範にほかならない。Keller はこれを Grice(1989)にしたがって「行動の格律」(maxim of action)と呼ぶ(以下、「格律」)。また IHT の説明のもうひとつのツールとなるのが、「生態的条件」(ecological condition)である。これは格律を生み出す言語的・社会的・文化的要因で、言語変化の「背景」にあたる。

- Question

- 近年の死語の例をいくつか挙げ、なぜ死語となってしまったのかを様々な背景から考察し、今後死語になりそうな語があるとすればそれはどんな語だろうか。
- 母語の発音の原因で、外国語の発音中で影響を与えるかどうか。例えば、日本人は英語のrとlの発音が苦手すること。
- 日本語にも地域によって、語尾など多様に変化するか、どのようなパターンがあるか。

Reference 中野弘三、田中智之著、『言語変化－動機とメカニズム－』、開拓社、2013 年、288-289 ページ参照。